博士学位論文 概要

観光歴史教育の理論と実践の研究
ー「観光のまなざし」の視座からー

須賀忠芳

本研究の目的は、歴史教育と「観光」の関係性をふまえた観光歴史教育を提示し、その理論と実践について論究し、実感としての歴史の学びを深化させ、社会状況全体を熟考させる場を提供するための歴史教育の内容、及びその手法としての観光歴史教育の意義を明らかにするものである。その際、歴史状況に影響を与える観光の様相を「観光のまなざし」から概観することとする。本研究では、観光歴史教育について、「構築された社会状況を見通す『観光のまなざし』から、今に連なる歴史事象を俯瞰して通観し、分析する歴史教育の内容、及びその手法。」として定義することとする。

本論文の各章の概要は以下の通りである。

序章では、本研究の目的、本研究における用語の定義と本研究の位置づけ、本研究の内容と構成について述べた。

第 1 章では、観光歴史教育の理論構築に向けた、歴史研究と歴史教育の関係性の観点から、観光と歴史の学びとを結合させた観光歴史教育に連なる「歴史実践」に着目し、その意義について論じた。本章では、以下の 3 点について提示した。第 1 に、いわゆる言語論的転回の下、歴史研究のあり方そのものが議論の的となる中で、歴史教育への注目度も高まっていることである。第 2 に、歴史教育者、及び学習主体の歴史状況への向き合い方について、同情的、同調的態度に起因する共感（sympathy）を喚起するものから、認知的共感、共感的認識（empathy）を喚起するものへと、転換させていくことが求められていることである。第 3 に、実感としての歴史の学びを深化させていく「歴史実践」としての歴史教育の実践が求められるとともに、その実践は、認知的共感、共感的認識（empathy）を喚起するものである必要があることである。それらをふまえて、empathy を含み込んだ、「歴史実践」としての歴史教育の手法として、観光と歴史の学びとを結合させた歴史教育とその実践、観光歴史教育を位置づけることを提起した。

第 2 章では、歴史研究・観光研究・歴史教育の関わりをふまえた観光歴史教育の理論について明らかにした。その際、観光を素材とした歴史研究の現状と課題、観光を素材とした「学び」への志向性、観光に注目する学校教育及び教育実践の概況を明らかにし、第 1 章の記述もふまえて、観光学・観光行動と、歴史学・歴史研究、教育学・教育実践（特に社会科教育）／歴史教育・歴史教育実践の関係性に関する論点について整理した。これらの論点をふまえて、観光歴史教育の理論について明示した。

第 3 章では、本研究で取り上げる授業実践科目の概要と「観光のまなざし」に関わる観点について論述した。「観光のまなざし」から捉えた学習者の観点として、「直観／理解」、「思考／判断」、「認識／評価」の三つの観点を設定した。

第４章では、「観光」と歴史研究、歴史教育、及び歴史認識の関わりについて、現在の福島県会津地方における幕末の状況を事例として分析を加えつつ、観光歴史教育の教材分析

並びに実践研究に取り組んだ。当該事例については、固定化した「会津戦争観」「白虎隊像」からなる「幕末会津」のストーリー化が、アジア・太平洋戦争における国家総動員の施策の下でフレームアップされたものであったものの、それが、組織に身を献じた純粋さのみが強調され、地域住民、及び観光者の意識、動向に大きく作用することとなったことを提示した。当該事例に関する授業実践では、①事実としての歴史状況の認識、②利用される歴史解釈に関する認識、③観光状況に影響を受ける歴史認識の固着化と客観的な歴史認識の意義の3つを授業化の観点として実践に取り組んだ。従来の授業化における①②の観点に加えて付加された、③の観点こそは、観光歴史教育における特徴的な観点であり、「観光のまなざし」に関わる観点から、当該状況を「認識／評価」するものへと結実されていることを明示した。

第 5 章では、地域史の学びの意義を確認するとともに、その課題について論述し、当該課題の克服のために観光歴史教育の授業実践が有効であることを提示した。事例としては福島県下郷町・大内宿（福島県南会津郡下郷町大内区）を取り上げた。当該事例である大内宿は、1960 年代半ばに、茅葺き屋根の軒を並べる近世宿駅さながらの集落景観が注目され、多くの観光者が当地を訪れることとなった。ところが、興味本位に当地を訪れる観光者に地元は困惑し、観光化の指針に異を唱える動きの中で、1975 年ごろには集落から茅葺き屋根の景観は失われつつあった。それを、地域の有志が奔走し、多くの家が屋根を茅葺きに戻し、年間 100 万人近くの観光者を迎える観光地となった。当該事例に関する授業実践では、学習主体は、地域の歴史観光素材を通して、俯瞰して地域を見つめ、それが地域における文化資源の活用と地域活性化に強く影響することを実感し、「観光のまなざし」に関わる観点から当該状況を「直観／理解」するに至った。同時に、地域の課題に関わる empathy を獲得し「歴史実践」を体感することとなった。歴史資源を活用した地域振興の様相と、それに関わった人々の動向及び地域の変容に伴う課題とを「直観／理解」することで、地域史の理解及び地域認識は大きく深化することとなったことを明示した。

第 6 章では、平和教育の課題について論述し、当該課題の克服のために、観光歴史教育の理論をふまえた授業実践が有効であることを提示した。事例としては、戦争と戦争遺跡をめぐる概況を取り上げた。当該事例に関する授業実践では、戦争遺跡を観光素材として位置づけることの意味とその課題を主題として実践に取り組んだ。その際、3 つの段階を設定し、3 つ目の段階「戦争遺跡を観光地化することの是非に関する検討、考察」では「原爆ドームを背景に、笑顔でピースサインを作り記念撮影をしている人たちが理解できなかった」とする意見について、①不謹慎な態度が「横行」する中で、戦争遺跡は観光地化すべきではない、②戦争の事実をストレートに伝える戦争遺跡の保存と観光化が必要、とした戦争遺跡の観光地化を切り口とした 2 つの意見の賛否について議論し、考察を深めさせた。学習主体は、自らの観光者としての行動も想定しながら、名所化した戦争遺跡の観光体験を満喫する観光者と、その対極として、戦争遺跡の威容を実感し真摯な態度で接する観光者の双方が形成する「観光のまなざし」に対して、その両者の正統性を「思考／判断」するに至った。同時に、歴史事象に対する、観光行動を念頭において具体的アプローチから、戦争の実相と戦争遺跡保存に関わる empathy を獲得し「歴史実践」を体感することとなった。「観光のまなざし」について、それを分析し、「思考／判断」 していくことで、戦争と戦争遺跡に関わる認識は大きく深化することとなったことを明示した。

第 7 章では、本研究全体を総括しつつ、観光歴史教育の歴史教育における意義について論

述した。観光歴史教育の有用性について、以下の3点を挙げた。第1に、観光行動も想定した「二重の視点」が形成されることが、歴史状況の多様な理解、認識を図る歴史学習において有効であるという点である。第2に、「観光のまなざし」をふまえた分析から、学習者に、歴史事象について、実感を持って体感させつつ、より俯瞰して認識させることが可能となるという点である。第3に、上記2点をふまえて歴史事実を洞察することで、学習者は、歴史状況に対する、同情的、同調的態度に起因する共感（sympathy）から、認知的共感、共感的認識（empathy）を形成するに至ることが可能となるという点である。これら三点を明らかにし、観光歴史教育が、歴史教育における有用な手法として位置づけることができることを明示した。その一方で、観光歴史教育の観点からは、歴史認識、歴史教育と観光に関わる相剋が見出せることも指摘した。同時に、その相剋を通して、学習主体に、観光の側面から歴史に向き合わせることは、歴史状況への安易な向き合い方に、おのずから気づかせるための方法となることを明示した。

終章では、本研究の成果を次の 3 点にまとめた。第 1 に、歴史研究と歴史教育、及び、観光と歴史教育のそれぞれの関係性とその課題を明らかにしながら、観光歴史教育の理論を提示したことである。第 2 に、観光歴史教育の教材分析研究と実践研究から、観光歴史教育の内容を検討し、考察したことである。第 3 に、歴史教育の内容、及びその手法としての観光歴史教育について、理論と実践をふまえて、その有用性を明示するとともに、歴史認識、歴史教育と観光の相剋についても示し、それらをふまえて、観光歴史教育の意義を明らかにした。その際、観光歴史教育は、歴史教育の場ではむしろ見えにくくなってしまう歴史認識の課題を、観光の現場での歴史状況、歴史的遺物に向き合わせる観光施策の観点から浮き彫りにし、歴史認識のあり方について再考を図ることとなることも提示した。これらの点から、観光歴史教育は歴史教育の内容、及びその手法として有効なものと捉えることができることを明らかにした。

一方、本研究における今後の課題として以下の三点を提示した。第一に、観光歴史教育の手法を、初等教育も含めた教育段階にいかに適用するべきかということである。第二に、観光歴史教育は、空間軸を主とした観光の見立てから、対象とする教材が限定的なものとなってしまうことである。第三に、上記二点とも関連しつつ、「観光」の認識が一面的に捉えられる中で、教育現場で観光が軽視される傾向にあることが挙げられる。これらの課題をふまえて、多様な側面を有する「観光」に関して、広く認識を深め、観光歴史教育の意義を広く提示していくことが必要であると言えるのである。